



TITLE:

<雑録>満漢文御製親征朔漠方略の
刊行：フツクス氏論文要略

AUTHOR(S):

今西

CITATION:

今西. <雑録>満漢文御製親征朔漠方略の刊行：フツクス氏論文要略. 東
洋史研究 1940, 5(3): 204-205

ISSUE DATE:

1940-04-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145686>

RIGHT:

滿漢文御製親征朔漠方略の刊行

——フツクス氏論文要略——

一

朔漠方略には滿文本と漢文本との二つがある。ところでその刊行年に就いて考へて見ると、滿文本の序には年號の記入がなく表の方に康熙四十八年十二月十九日の日附がある。反對に漢文本では序に康熙四十七年七月初九日の日附があつて表の方には日附の記入がない。四庫全書總目、國朝宮史、故宮殿本書庫現存目、それから東華錄、實錄、などは何れも四十七年の方を刊行年として採り、ひとり滿文本を取り扱つた滿文書籍聯合目錄のみが四十八年の方に従つてゐる。然し實はこれらの年號は何れも實際の刊行年ではない。私は今こゝに二つの新資料を提供する。

二

その一つは北京劉詩孫氏の所藏になる御製親征朔漠紀略の試譯本とも稱す可きものである。一本、三十七葉、朱刷り。第一葉のタイトルに「聖駕親征噶爾且方略」とあり、柱には「親征方略」の四字があるが、この内容は實は一朝漠方略中の「朔漠紀略」に當るもの、朔漠紀略の前身とも見る可きものなのである。そしてこゝに寫眞で示す通り、本書第三十七葉の裏、即ち最終のところに「杭州織造郎中加一級臣敖福合恭譯敬刊」とあり、その横に「翰林院編纂臣凌紹斐恭訂」

と朱筆で書き足されてゐる。如何様本書内には到る處、塗抹改訂の筆が入れられてゐて、その改訂された文言は後の朔漠紀略に餘程近いものである。滿文朔漠紀略と本書とそれから決定版朔漠紀略とを採つて見ると、滿文から本書へ、それから決定版への經路が明瞭である。本書を以て試譯本と稱する所以である。本書の作者敖福合は滿人に相違ないが、私の搜索した限りに於いては彼が如何なる人物であつたか全く判明しない。注意すべきことは朔漠方略編纂の關係者名中にも彼の名は見當らないことである。敖福合本の改訂者凌紹斐は朔漠方略編纂の副總裁の一人として二格と併出する人物である。然し彼の傳に就いても詳細は判明しない。

聖駕親征噶爾且方略が滿文本から翻譯されたといふことには、特に興深いものがある。私の見る限りに於ては康熙時代に滿文本から漢文本が作られたといふものはない。百二老人言錄や滿洲祭神祭典禮は滿文本から漢文本が作られてはゐるが、これ等は康熙以後のものである。然し私は康熙時代に作られた他の方略、例へば平定三逆方略、平定羅刹方略、平定海寇方略、平定察哈爾方略の如きも矢張り原本は滿文本で、漢文本はその翻譯だと言ひ得ると信ずる。何故かなれば征討に従つた軍の高官は大抵滿人であり、それら滿人の報告こそ

は方略編纂の根本資料になつたのだから。

次に私は敖福合本、即ち「聖駕親征噶爾旦方略」と、漢文朔漢紀略、即ち「御製親征朔漢紀略」とそれからこれ等兩者の原本である滿文朔漢紀略即ち *Han-i araha beye wargi anargi bade dalaha herjin šošon* との三つを比較して見ようと思ふ。以下滿文本をA、敖福合本をB、漢文紀略をCとして表示することとする。(表はF氏本文に書き見られ度し)

三

資料の第二。最近私は北京で二十冊からなる滿文平定朔漢方略の試刷本を手に入れた。この種の資料は未だ嘗つて語られたことのないものであらう。寫眞で示す通りモト刷り、つまり試刷本には相當の誤りがある。これを朱筆で訂正し、更にその訂正した文言だけを版に起して、これを小紙片に印刷し、本の天部に貼附してあるのである。木版印刷の校正過程を如實に示すものとして特に注目し値するものであらう。

先述するが如く、朔漢方略の日附は漢文本序の四十七年七月九日と滿文本表の四十八年十二月十九日とである。之等日附の多くは原稿の完成した際のもものと見らる可きものである。然し乍らこの場合、漢文本が四十七年に出来上つたと考へることは妥當でない。漢文の表には成程年月日の記入はないが、然しこの表の中に「復蒙御製于簡端」の句がある。これは漢文本の完成が、御製の日附よりは更に後になるものであることを示すものに他ならない。

翻つて滿文本の完成を考へるに、表によればこれは明らか

に四十八年十二月のことである。然し私は今こゝに試刷本といふ一新資料を提供した。如斯き校正の手段を経、幾百部か幾千部かのホン刷りが出来上るまでには相當しかる可き時日を要することは言ふまでもないであらう。私は今こゝに、滿文朔漢方略の刊行年月として新に康熙四十九年を提稱しようと思ふ。漢文本の刊行年月に就いては確言を憚るが、然しその已に序の年月を以てし得ないことは前述の通りである。そこで、これは一私案であるが、滿文本の刊行に際して序の年月日記入を缺いたと同様に、漢文本刊行に際しても亦、表の年月日と表との年月日は滿漢文に通ずるものと見るのである。且つ又漢文本にあつては、決定版紀略が刊行されるまでに敖福合本の如きが試譯刊行されたりしてゐて、その決して早くないものであることを語つてゐる。私はこれによつて漢文本の刊行も矢張り四十九年に見做してよいだらうと思ふ。

尙終りに、滿文試刻本の誤刻に就いて一言するならば、誤刻の原因は刻匠が滿人ではなかつた、漢人であつた、殆んど或ひは全く滿語を解しないものだつたといふことに歸せられるだらうと思ふ。それは誤刻の多くが大概愚かしいものであること、例へばoの代りにi、rの代りにw、eの代りにaの如きである點に於いて認め得よう。そして又この誤刻の頁は全部が改刻せられたものではなくて、誤刻文字の所だけが改刻嵌せられたものであることも容易に推測されよう。

(今西譯)